

自己連続性についての概念整理と研究の展望

筑波大学大学院人間総合科学学術院 浅山 慧

筑波大学人間系 外山 美樹

The concept of self-continuity and future research perspectives

Akira Asayama (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Self-continuity refers to the sense of connection between one's past, present, and future. There are several types and different perspectives concerning self-continuity, with interpretations varying across different studies. However, few studies have acknowledged such differences in self-continuity types and perspectives, as most prior studies have failed to distinguish these pertinent aspects. Accordingly, the present study provides an overview of previous studies to consider the various aspects of self-continuity. Self-continuity is divided into pre-reflective continuity (phenomenological continuity or chronological continuity) and consciously-formed continuity (semantic continuity or retrospective continuity). Although consciously-formed continuity is based on stability and a self-narrative, numerous prior studies have either failed to differentiate between the various sources of self-continuity or have treated self-continuity with different foundations as a single concept. Finally, this study reflects on the need to recognize self-continuity due to different sources as reflecting different aspects of self-continuity.

Key words: self-continuity, psychological connectedness, personal continuity, identity; time perspective

人は時間とともに変化する。長期的に身体や認知機能は発達・老衰し、経験によって態度や価値観は形成され、また短期的にも心身の状態は常に変化している。それにもかかわらず、人はなぜ自己が時間を超えて同一の存在だと認識できるのかという問題は、これまで哲学的に議論されてきた (e.g., Dennet, 1992; Klein, 2014; Parfit, 1984 森村訳1998; Ricoeur, 1985 久米訳1990)。そして哲学的な議論を踏まえ、心理学では、自己の通時的な同一性についての感覚を自己連続性 (self-continuity) という一つの変数として扱い、他の変数との関連について検討してきた。自己連続性についての心理学的研究は、アイデンティティの感覚 (Erikson, 1980 西平・中島訳2011) や時間的展望 (石井, 2015)、心理臨床 (村田, 2008 ;

2009) や行動経済学における遅延価値割引との関連 (Ersner-Hershfield, Garton, Ballard, Samanez-Larkin, & Knutson 2009a) など、様々な領域において行われている。

しかしながら、自己の通時的同一性の問題が哲学的な議論の対象となっていることからわかるように、自己連続性という概念は捉え方が一様ではない。すなわち、「自己が経時的に同一の存在としてつながっている」とは具体的にどのような状態を指しているのか、あるいは何をもってそのような状態が成り立っているとみなすことができるのかについては、必ずしも見解が一つに定まらない。たとえば、過去や未来と現在の自己を比較して、変わっていないと感じる部分に焦点を当て、「変わっていない、ゆえに

自己は連続している」と捉えることは可能である (Parfit, 1984 森村訳1998)。また、経時的な自己の変化の過程を統合的に解釈することで自己物語を形成し、「物語としてつながっている、ゆえに自己は連続している」と捉えることも可能である (Ricoeur, 1985 久米訳1990)。自己連続性に対するこのような捉え方の相違が個人間で見られることは先行研究で示されているが (Chandler, Lalonde, Sokol, Hallett, & Marcia, 2003; Dunlop & Walker, 2015), 研究間においても、自己連続性の捉え方は一様ではない。しかしながら、多くの自己連続性研究において、そのような研究間での自己連続性の捉え方の相違には言及されていない。そのため、自己連続性研究には様々な捉え方や指標が混在している。また、何らかの観点を導入して自己連続性に複数の側面や観点を提案する研究も存在するものの (Addis & Tippett, 2008; Bluck & Liao, 2013; Prebble, Addis, & Tippett, 2013), 自己連続性の十分な整理には至っていない。そこで、本稿では、先行研究を概観して自己連続性について概念整理を行い、自己連続性研究の今後について展望することを目的とする。

自己連続性の定義と位置づけ

自己連続性に対する捉え方は研究によって異なることから (Löckenhoff & Rutt, 2017), 各研究で明示されている自己連続性の定義は必ずしも完全には一致しない。しかしながら、多くの研究で共通する部分を捉えれば、自己連続性は、過去・現在・未来に渡って自己が同一の存在としてつながっているという感覚、と定義できる¹⁾。自己連続性を扱った心理学的研究は、管見の限り、Robinson & Freeman (1954)が初めてである。Robinson & Freeman (1954)は、自己連続性を、自己がこれまでに変化し、これからも変化していくことを認識しながらも、本質的には同一の個人で在り続けるという感覚と定義している。近年の研究においても、自己連続性の定義において、単に「同一の存在としてつながっているという感覚」よりも限定するような表現を含めないものは多く見られる (e.g., Sedikides, Wildschut, Routledge, & Arndt, 2015; Sedekides et al., 2016;

Van Tilburg, Sedikides, Wildschut, & Vingerhoets, 2019, Zou, Wildschut, Cable, & Sedikides, 2018)。一方で、自己連続性のこのような定義は抽象的であり、自己連続性とは具体的に何なのか、具体的に何をもちって自己が連続しているとみなされるのか、という点には言及されていない。それに対し、自己連続性に複数の捉え方や側面を仮定し、それらを対比して検討する研究もいくつか行われている。以下では、先行研究において、自己連続性にどのような捉え方や側面が仮定されているのかを概観し、自己連続性概念を包括的に整理する。

自己連続性に対する二つの理由づけ方略

上述の通り、自己連続性とは、自己が変化しているにもかかわらず同一の存在であり続けるという感覚を意味する。Chandler et al. (2003)は、個人がそのような変化と同一性の葛藤に対してどのように対処し、自己連続性の感覚を獲得しているのかを質的に検討した。Chandler et al. (2003)によれば、「自己が経時的に同一の存在としてつながっている」という認識は、二つの理由づけ方略 (warranting strategy) によって成立し得る。

一つ目は、自己の安定性 (stability) を根拠とするものである。自己の通時的同一性についての哲学的議論では、自己を自己足らしめる何らかの要素が不変であることが、異時点間の自己の同一性を規定するという主張が展開されてきた (e.g., Parfit, 1984 森村訳1998)。このような考え方にに基づき、自己の変化と同一性の葛藤に対して、自己の安定的な部分に焦点化することで、「だから自己は連続している」と理由づけることが可能となる。このような捉え方は、自己の中に不変的な部分を仮定する本質主義的な人間観に基づく、本質主義的主張 (essentialist arguments) だとされる (Chandler et al., 2003)。

もう一つの方略は、異時点間の自己に対する物語 (narrative) としての統合的な解釈、すなわち、自己の物語性を根拠とするものである。これは、人が世界との相互作用の中で、様々な対象に意味を付与する物語を形成し、その中心に位置づけられるものとして自己が認識されるとする、物語的自己同一性 (narrative identity) という考え方にに基づくものである (Dennet, 1992; Ricoeur, 1985 久米訳1990)。この考え方においては、過去の自己や未来の自己は、現在の自己が形成した物語の中に同一の存在として意味づけられ得る。すなわち、自己物語の中で過去や未来と現在との間のつながりが解釈されることで、「だから自己は連続している」と理由づけることが可能となる (Chandler et al., 2003)。このような捉え

1) 例外として、Dunkel & Anthes (2003) や Dunkel (2005) では、アイデンティティの感覚の中核的な要素である「斉一性と連続性」を包括して「自己連続性」と表現される。この場合、「斉一性 (sameness)」が空間的連続性 (spatial continuity), 「連続性 (continuity)」が時間的連続性 (temporal continuity) と表現される。

方は、自己物語の形成や物語的自己同一性といった考え方に基づくものであることから、物語的主張 (narrative argument) とされる (Chandler et al., 2003)。

Chandler et al. (2003) では、自己連続性に対するこのような捉え方の違いが青年期の個人において見られるのかをインタビュー調査で検討した。その結果、ほとんどの個人は、自身の自己連続性について問われた際に、本質主義的主張と物語的主張のいずれかの観点に立つことが示された。この結果は、Dunlop & Walker (2015) でも再現されている。さらに、Becker et al. (2018) では、自己の安定性や物語性を自己連続性の基礎として位置づけ、それらが「自分の過去・現在・未来がつながっているという感覚」についての自己報告をどのように説明するのかについて検討された。その結果、この「つながっているという感覚」がどちらによって説明されるのかは文化的要因によって調整されることが示された。

これらの研究は、自己連続性に対する理由づけ方略の観点から、自己連続性に複数の捉え方が存在することを示すものである。一方で、これらの研究では、自己連続性自体に複数の側面を仮定しているわけではない。

自己連続性におけるこのような捉え方の違いは、個人間だけでなく研究間においても認められる。たとえば、自己連続性を、自己の構造的な安定性の観点から捉え、ある時点と現在の自己との間の類似性を自己連続性の (操作的) 定義として採用している研究は多く見られる (e.g., Adelman et al., 2017; Blouin-Hudon & Pychyl, 2015; Ersner-Hershfield et al., 2009a; McCue, McCormack, McElnay, Alto, & Feeney, 2019; Rutchick, Slepian, Reyes, Pleskus, & Hershfield, 2018; Sokol & Serper, 2017)。一方で、自己連続性を自己物語の観点から捉え、自己物語の構造的一貫性や特定の出来事と現在自己との間の関連性を自己連続性の指標とする研究も見られる (e.g., Allé et al., 2017; McLean, 2008; 長峯・外山, 2020)。つまり、Chandler et al. (2003) における自己連続性の二つの捉え方は、それ自体が自己連続性の異なる側面として位置づけられているわけではないものの、研究間においては、そのような捉え方の違いに対応した、異なる (操作的) 定義の自己連続性が存在している。

自己連続性における “I” と “Me” の 2 側面

Chandler et al. (2003) における自己連続性の二つの捉え方は、自己連続性に対する理由づけ方略、

すなわち自己連続性を意識的に形成しようとする際の方略の違いによるものである。一方で、自己連続性には、そのように意識的に根拠を求めて形成されるものだけでなく、過去や未来を想起することで体験的に得られるものもあるとされる。

意味的連続性と現象学的連続性 Prebble et al. (2013) は、自己連続性には、現在と過去や未来とのつながりを意識的に形成することによって得られる意味的連続性 (semantic continuity) と、過去や未来における出来事を再体験・先行体験することによって得られる現象学的連続性 (phenomenological continuity) があると仮定した。意味的連続性は、過去から現在を通して自己がどのような存在であるのかについての認識や、過去から現在にかけて自己がどのように変化してきたのかという自己物語の形成によって得られる連続性である。特に後者は、物語的連続性 (narrative continuity) としても概念化されている (Addis & Tippett, 2008; Allé et al., 2017)。Prebble et al. (2013) によれば、このような自己連続性は、自伝的記憶における意味記憶 (自伝的意味記憶)、すなわち過去に経験した出来事や自己についての意味的な記憶に基づくものである。

現象学的連続性は、過去や未来の出来事の主観的な再体験・先行体験、すなわちメンタルタイムトラベル (Suddendorf & Corballis, 1997) によって得られる連続性である (Prebble et al., 2013)。Prebble et al. (2013) によれば、このような自己連続性は、自伝的記憶における意味記憶だけでなく、過去の出来事についての状況や文脈情報を含むエピソード記憶 (自伝的エピソード記憶) にも基づくものである。Tippett, Prebble, & Addis (2018) ではこの分類を用いて、エピソード記憶に障害が見られる、つまり現象学的連続性が損なわれているアルツハイマー病の患者を対象とし、意味的連続性の役割について検討している (Tippett et al., 2018)。

この意味的連続性と現象学的連続性は、自伝的記憶における意味記憶とエピソード記憶という区別以外に、主体としての自己 (I) によって体験されるものか、客体としての自己 (Me) への認知によって形成されるものかという形でも区別される (Prebble et al., 2013)。メンタルタイムトラベルによって現在の自己が過去や未来の自己を体験するとき、それは主体としての自己 (I) が通時的に同一の存在であることを体験していると言える。一方で、過去や未来の自己を想起し、現在自己との間に安定性を見出したり、それらの間の変化をつなぐ自己物語を構築したりするとき、それは客体としての自己 (Me) が通時的に同一の存在であることを認識しようとしている

と言える。このように、意味的連続性と現象学的連続性は、自己連続性を捉える視点からも区別される (Prebble et al., 2013)。

経時的連続性と回顧的連続性 Bluck & Liao (2013) は Prebble et al. (2013) と類似した観点から、自己連続性を階層的に分類している。一般に、人は過去や未来の自己について想起した時に、過去や未来と現在との間のつながり (同一性) を、理由を求めずに認識することができる。Bluck & Liao (2013) は、このような、意識的な努力を必要とせずに感じることができる、最も基礎的な連続性を、経時的連続性 (chronological continuity) として概念化した。このような自己連続性は、「自己連続性について自分がどのように感じているか」というような反省的な意識に先行して存在する、すなわち前反省的 (pre-reflective) な連続性であり、意識的に何かを拠り所にして獲得されるものではないため、自己や環境の変化による影響を受けにくいとされている (Klein, 2014)。つながり自体を意識的に捉えようとすることで得られるものではない、前反省的な連続性であるという点で、Prebble et al. (2013) における現象学的連続性は、この経時的連続性に含まれると考えられる。

一方で、現在の自己が過去や未来の自己と同一の存在としてつながっていると言えるのはなぜか、という問いに直面した時などに、意識的につながりを形成しようとすることで成立する自己連続性もあり、こちらは回顧的連続性 (retrospective continuity) として概念化されている (Bluck & Liao, 2013)。この回顧的連続性は、意識的な努力によって形成される自己連続性であるという点で、理由づけ方略 (Chandler et al., 2003) によって形成される自己連続性や、意味的連続性 (Prebble et al., 2013) に対応するものと言える。また、回顧的連続性は、「自己連続性について自分がどのように感じているか」という反省的な意識を前提とし、何らかの根拠によって自己連続性を確証することで形成される。そのため、自己や環境の変化によって、その根拠としているものが揺らいだ場合、回顧的連続性は損なわれる可能性があると考えられる (Habermas & Köber, 2015b; Klein, 2014)。一方で、そのような変化に直面しても過去や未来の自己と現在自己との同一性についての認識が完全に損なわれることがないのは、回顧的連続性の基礎として経時的連続性が存在するからだと考えられる (Klein, 2014)。

以上のように、自己連続性は、どのような視点や意識過程で得られるかという観点から、二つのタイプに分類される。自己連続性の基礎について検討し

た Becker et al. (2018) では、自己連続性は理由づけ方略のような意識的な過程だけではなく、過去や未来の想起などによって暗黙的にも形成されるとしている。また、Habermas & Köber (2015b) では、過去の想起やメンタルタイムトラベルに伴う意識について自己報告を求めることで、経時的連続性や現象学的連続性のような前反省的な自己連続性の尺度による測定が試みられている。自己連続性研究においては、意識的に形成され、認知される自己連続性が中心的に検討されてきたが、近年では過去や未来の想起やメンタルタイムトラベルなどの主観的な経験による自己連続性も注目されていると言える。

自己連続性研究における 自己連続性の捉え方の混在

上述のように、近年では前反省的な自己連続性の存在が指摘されているものの、これまでの自己連続性研究では、意識的に形成される自己連続性についての検討が中心に行われてきた。さらに、両者を対比させた議論においても、意識的に形成される自己連続性の重要性が指摘されている (Habermas & Köber, 2015b; Tippet et al., 2018)。

しかしながら、そのような意識的な自己連続性における捉え方の相違 (Chandler et al., 2003, Löckenhoff & Rutt, 2017)、すなわち自己の安定性に基づく連続性と自己の物語性に基づく連続性については、自己連続性の異なる側面として位置づけられているわけではない。そのため、多くの自己連続性研究では、自己連続性に複数の捉え方があることに言及しておらず、その研究における自己連続性の捉え方を相対化していない。つまり、先行研究には、自己連続性に対する捉え方の異なる研究が混在している。

Becker et al. (2018) では、自己連続性に対する理由づけ方略 (Chandler et al., 2003) の観点から、自己の安定性と物語性を自己連続性の基礎として位置づけ、どちらが自己連続性を説明するのかには個人差 (文化差) があることを示した。一方で、構成要素が異なるにもかかわらず、それらを「自己連続性」として一括りにして扱うことが妥当なのかという点について、Becker et al. (2018) では議論されていない。

Löckenhoff & Rutt (2017) では、自己連続性に対する捉え方を、異時点間における自己の構造の安定性に焦点化する構造的観点 (structural perspective) と、自己の経時的な過程 (自己物語の形成やメンタルタイムトラベル) に焦点化する過程的観点 (process

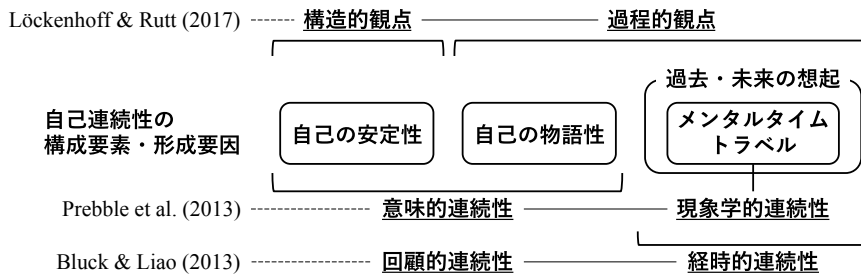


Figure 1. 構成要素・形成要因に基づく自己連続性の概念整理

perspective) を設定して整理している。そのうえで、自己連続性研究では前者が中心に行われてきた背景があり、後者についての検討を行う必要性が指摘されている。また、長峯・外山 (2020) においても、自己連続性に安定的な側面 (i.e., 自己の安定性) と変動的な側面 (i.e., 自己の物語性) があるとしたうえで、自己連続性に関する検討は片方の側面だけでは不十分であることが指摘されている。つまり、意識的に形成される自己連続性についても、それらを「自己連続性」として一括りにして扱うのではなく、捉え方、あるいは構成要素の異なる自己連続性として整理する必要性が考えられる (Figure 1)。そこで、以下では自己の安定性に焦点化した自己連続性研究と自己の物語性に焦点化した自己連続性研究について概観し、両者の相違について検討する。

自己の安定性に焦点化した自己連続性研究

自己の安定性の観点から自己連続性を扱う研究では、ある時点の自己と現在の自己との類似性 (similarity) や、ある時点から現在にかけての自己の安定性として自己連続性が捉えられている (e.g., Ersner-Hershfield et al., 2009a)。このような研究の多くは、Parfit (1984 森村訳1998) の通時的同一性に関する主張を基に自己連続性を捉えている。Parfit (1984 森村訳1998) は、自己の通時的同一性についての議論の中で、ある時点 (T_1) の自己と別時点 (T_2) の自己との同一性は、心的要素 (記憶、意図、欲求、性格など) の類似性を根拠とすることで認め

られると主張した。Parfit (1984 森村訳1998) はこの2時点間の自己の心的要素における類似性を心理的連結性 (psychological connectedness) と表現し、この心理的連結性を介してさらに別時点 (T_3) の自己と間接的につながっていることを心理的連続性 (psychological continuity) と表現した²⁾。さらに、Parfit (1984 森村訳1998) では、行動経済学における遅延価値割引 (temporal discounting) についても、この通時的同一性の観点から説明されている。Parfit (1984 森村訳1998) によれば、人がしばしば未来の大利益よりも現在の小利益のための行動をとる、すなわち遅延価値割引という現象が生じるのは、未来自己と現在自己との連続性が低いためだと考えられる。つまり、未来自己と現在自己との連続性が低い場合には、別人のように感じられる未来自己よりも、現在自己の利益となる行動を選択する方がその個人にとって合理的だと考えられる。

この Parfit (1984 森村訳1998) の議論を基にした、自己の安定性に焦点化した自己連続性研究は、Ersner-Hershfield, Wimmer, & Knutson (2009b) 以降、積極的に行われている (e.g., Bartels & Rips, 2010; Bartels & Urminsky, 2011; Bryan & Hershfield, 2012; Fu, Li, & Guo, 2020; Hershfield et al., 2011; Rutt & Löckenhoff, 2016; Sokol & Serper, 2019; Zhang & Chen, 2018)。Ersner-Hershfield et al. (2009b) は、未来自己と現在自己との類似性に基づく連続性を「未来の自己連続性 (future self-continuity)」として概念化し、Parfit (1984 森村訳1998) の遅延価値割引に関する仮説を検証した。その結果、この仮説が支持され、未来自己に関する判断を行う際の脳の活性部位が、他者ではなく現在の自己に関する判断を行う場合と類似しているときは、遅延割引課題における割引率が低下する傾向が示された。

2) Parfit (1984 森村訳1998) においては、2時点間の心的要素の共通性は心理的連結性 (connectedness) と表現されるが、自己の安定性の観点における自己連続性研究では、この2時点間の類似性についても「連続性 (continuity) として表現される。

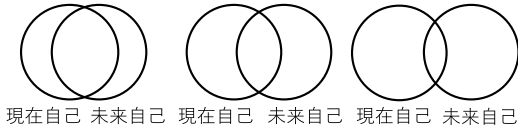


Figure 2. Ersner-Hershfield et al. (2009a) の「未来の自己連続性」の指標におけるベン図

そして、Ersner-Hershfield et al. (2009a) では、自己と他者の表象の重なりを測定する指標である Inclusion of Other in the Self scale (Aron, Aron, & Smollan, 1992) を基に、現在自己と未来自己の表象がどの程度重なっているかを測定する指標が作成された (Figure 2)。この指標では、現在自己と未来自己を表す 2 円が、重なり程度の異なる組み合わせで複数提示される。回答者は、「現在自己と未来自己がどの程度類似しているか」、「現在自己と未来自己がどの程度つながっている (connected) と感じるか」などの質問に対して当てはまる 2 円の重なり程度を選択する³⁾。この 2 円の重なりが大きいほど自己連続性が高いことを意味する。この指標は、自己の安定性の観点から自己連続性を扱う研究では多く用いられ、遅延価値割引 (Bartels & Rips, 2010; Bartels & Urminski, 2011; Ersner-Hershfield et al., 2009a, b; McCue et al., 2019)、健康行動 (Rutchick et al., 2019)、学習行動・学業パフォーマンス (Adelman et al., 2017; Blouin-Hudon & Pychyl, 2015)、道徳的判断 (Hershfield, Cohen, & Tholpison, 2012) など、自己制御に関連した多くの指標に対して一定の説明力を持つことが示されている。また、「未来の自己連続性」に対する操作や介入を行う研究では、この指標が操作チェックのために用いられ、自己制御や動機づけに対して有効な「未来の自己連続性」の操作・介入方法も検討されている (Chishima & Wilson, 2021; Hershfield et al., 2011; Landau, Oyserman, Keefer, & Smith, 2014; Nurra & Oyserman, 2018)。さらに、一部の研究で

はこの指標を過去自己との連続性に援用し、過去自己と現在自己との類似という意味での自己連続性が精神的健康に及ぼす影響についても検討されている (Sokol & Eisenheim, 2016; Sokol & Serper, 2019)。

一方で、この指標については、複数の項目が用いられる場合には内の一貫性が低く (Ersner-Hershfield et al., 2009a, Rutchick et al., 2018)、多くの場合 1, 2 項目のみで用いられるという問題点も指摘されている (Chishima & Wilson, 2021; Sokol & Serper, 2020)。このような問題を踏まえ、Sokol & Serper (2020) は「未来自己との類似性」、「未来自己の鮮明性」、「未来自己へのポジティブ感情」の 3 因子からなる「未来の自己連続性」の尺度 (Future Self-Continuity Questionnaire) を作成している。しかしながら、これら 3 因子を自己連続性の構成要素として位置づける仮説 (Hershfield, 2011) については十分な根拠が示されていない。特に「未来自己の鮮明性」と「未来自己へのポジティブ感情」については、Parfit (1984 森村訳1998) の通時的同一性についての議論から外れているにもかかわらず、これらがなぜ自己連続性の要素として位置づけられるのかという内容的な妥当性についての検討が不足している (Sokol & Serper, 2020)⁴⁾。

また、自己連続性研究の中には、自己連続性に対する捉え方を明示してはいないものの、自己の安定性と関連した指標を用いたものも見られる。たとえば Sadeh & Karniol (2012) や Sharma, Åkerlund, Liao, & Bluck (2021) では、過去自己・現在自己・未来自己における特徴についての自己報告の一致度が指標とされており、また Sedikides et al. (2015) における独自作成の尺度項目の中には自己の安定性に関する項目が含まれている。つまり、一部の自己連続性研究においては、自己に安定的な部分があることを自己連続性の要素として暗黙裡に仮定していると考えられる。

自己の物語性に焦点化した自己連続性研究

自己の物語性の観点から自己連続性を扱う研究では、過去や未来と現在とが物語によってつながりを持っていることを、自己連続性として捉えている

3) Sokol & Serper (2019) では、この方法で測定される自己連続性が人生におけるポジティブな変化の大きさと正の相関を示した (Sokol & Serper, 2017) ことを根拠に、これを前反省的な連続性の指標と考えることができるとしている。しかしながら、この測定方法では自己連続性についての直接的な自己報告求めており、「自己が、過去や未来の自己と現在自己との間のつながりや類似性についてどのように感じているか」を反省的に捉えることを前提としている。したがって、この指標によって測定される自己連続性は、前反省的な自己連続性とは異なると考えられる。

4) Allé et al. (2016) では、メンタルタイムトラベルにおける主観的な体験の鮮明さを現象学的連続性の指標として用いている。しかしながら、Hershfield (2011) では、未来自己の鮮明性が「未来の自己連続性」を高めるものであることについては論じているものの、自己連続性の構成要素として位置づけることの内容的な妥当性については説明されていない。

(Allé et al., 2016; Habermas & Köber, 2015b)。この観点において、自己連続性は、一貫性のあるライフストーリーの形成によって喚起される感覚だとされている (Allé et al., 2016; McLean, 2008)。また、この捉え方における連続性は、自己の変化につながりを見出すことで得られるものだという点で、自己の安定性による捉え方とは異なると考えられる (Habermas & Köber, 2015a, b; Ricoeur, 1985 久米訳1990)。

このような自己連続性の基礎となる自己物語の形成は、多くの場合、質的に検討されてきた。具体的には、自己の過去についての語りの構造的な一貫性や、語りの中の出来事と自己との関連性 (自己-出来事関連性: self-event connection) が、自己の物語性の観点における自己連続性の指標とされている (e.g., Allé et al., 2016; McLean, 2008; Tippett et al., 2018)。語りの構造的な一貫性は、語られた出来事の時系列に関する時間的一貫性、語り全体を貫くテーマの存在に関する主題的一貫性、語られた出来事間、そして出来事と自己との間の因果性に関する因果的一貫性という3側面から捉えられる (Habermas & Bluck, 2000)。一方で、この構造的な一貫性の3側面を踏まえ、自己物語がどの程度まとまりのあるものとして形成されていると自覚しているかを量的に測定する尺度も作成されている (Hallford & Mellor, 2017)。また、自己-出来事関連性についても、自己報告による量的な測定が行われている (長峯・外山, 2020)。自己における経時的な物語性については、先行研究では質的な検討が中心であるが、近年では量的な検討が試みられつつあると言える。

このような自己の物語性の指標については、ある時点と現在との2時点間の自己連続性を問題とするか、人生全体を通じた自己連続性を問題とするかによって、自己物語のどのような側面を考慮すべきかが異なると考えられる。2時点間の連続性については、たとえば複数の出来事や時系列に関する時間的一貫性や主題的一貫性は問題とならず、現在自己と別の時点の出来事との関連、すなわち自己-出来事関連性が重要となる。この自己-出来事関連性には、自己の変化と安定性のいずれに関するものかという観点から二つのタイプが存在する (Pasupathi & Mansour, 2006; Tippett et al., 2018)。一方で、自己の物語性に基づく連続性は、自己の変化を解釈してそこにつながりを見出す点に特徴づけられる (Habermas & Köber, 2015a, b)。したがって、自己の安定性に基づく連続性との対比において、2時点間の物語的な連続性の要素として位置づけられるのは、自己の変化に関する自己-出来事関連性だと考

えられる。

人生全体を通じた連続性については、現時点と別時点との直接的な関連性ではなく、人生全体を通して一筋の物語が形成されているかが問題となる。そのため、一連の出来事や自己との関連性における因果的一貫性に加えて、自己物語全体を通じた時間的一貫性と主題的一貫性も考慮する必要があると考えられる (Tippet et al., 2018)。

自己の物語性に基づく連続性を扱う研究において、2時点間の連続性と人生全体を通じた連続性のいずれを扱うのかは、研究の目的によって異なると考えられる。一方で、自己の安定性の観点から自己連続性を扱う研究においては、Parfit (1984 森村訳1998)における心理的連続性に対応する人生全体を通じた連続性ではなく、心理的連結性に対応する2時点間の連続性が中心的に扱われている (e.g., Ersner-Hershfield et al., 2009a)。したがって、自己の安定性に基づく連続性と対比するような場合においては、2時点間の連続性、すなわち自己-出来事関連性を扱うのが有用だと考えられる (e.g., 長峯・外山, 2020)。

また、現在と過去や未来との関連性に焦点を当てているという点は、時間的展望研究における時間的連続性概念とも共通する部分である。時間的展望研究において、異時点間の関連性を捉える方法の一つとして、サークル・テストが挙げられる (Cottle, 1967; 日潟, 2012)。これは、過去・現在・未来の自己を表す三つの円を回答者が自由に描写し、描かれた円の大きさや位置関係から個人の時間的展望を解釈する投影的方法である。描写された円の重なりが時間次元間の関連性 (temporal relatedness) を表すとされているが、日潟 (2012) ではこれを「時間的連続性」として解釈している⁵⁾。さらに、石井 (2015) では時間的展望の下位概念としての時間的連続性 (time continuity) を測定する尺度を作成している。その内容は過去と現在との関連性 (e.g., 過去があるから今がある) や現在と未来との関連性 (e.g., 今は将来のためのステップである) についての項目で構成されている。したがって、時間的展望研究においては自己の時間的な関連性が「連続性」として捉え

5) Ersner-Hershfield et al. (2009a) による「未来の自己連続性」の尺度でも各時間次元の自己を表す円の重なりを連続性の指標としている。しかしながら、Ersner-Hershfield et al. (2009a) では二つの円がベン図としての役割を持ち、重なりは各時間次元における自己表象の類似性の程度として解釈されるため、Cottle (1967) のサークル・テストとは解釈が異なる。

られていると考えられる。

以上のような時間的連続性は、異時点間の関連性という意味で連続性を捉えているという点で、自己の物語性に基づく連続性と共通すると言える。

自己連続性研究の現状

以上のように、自己の安定性に基づく連続性と自己の物語性に基づく連続性は、焦点を当てている側面が異なる。何によって構成されるか、何をもちて連続しているとみなすかが異なっていることを考慮すれば、これらを一括りにして議論を展開することが妥当なのかという点については検討する必要があるだろう。

既述の通り、自己連続性の捉え方の違いについて、たとえばChandler et al. (2003)やDunlop & Walker (2015)では自己連続性に対する理由づけ方略として、Becker et al. (2018)では自己連続性の基礎の違いとして位置づけられており、それらの個人差が検討されている。しかしながら、これらの研究では、そのような異なる方略や要因によって形成される自己連続性を、それぞれ異なる側面として仮定しているわけではない。さらに、多くの自己連続性研究では、それぞれの研究で扱われているものとは異なる捉え方の自己連続性があることには言及されていない(e.g. Rutchick et al., 2019)。Löckenhoff & Rutt (2017)や長峯・外山(2020)などでは、自己の安定性と自己の物語性を、自己連続性の異なる側面として位置づけ、自己連続性に関して両方の側面から検討する必要性が指摘されている。一方で、一部の先行研究では、自己の安定性と物語性の両方に言及しながら、両者を自己連続性の中で異なるものとして区別せずに議論を展開している(Blouin-Hudon & Pychyl, 2017; Tausen, Csordas, & Macrae, 2020; Zhang & Chen, 2018)。つまり、自己の安定性に基づく連続性と自己の物語性に基づく連続性は、焦点を当てている側面や構成要素が異なるため、区別して検討する必要性が指摘されているものの、現状としては、これらがほとんど区別されず、自己連続性に対する複数の捉え方が混在していると言える。

自己連続性研究の今後についての展望

以上をまとめると、まず自己連続性研究では、現象学的連続性(Prebble et al., 2013)や経時的連続性(Bluck & Liao, 2013)のような前反省的な自己連続性よりも、意識的に認識される自己連続性が中心的に検討されてきた。そして、そこには自己の安定性と自己の物語性という二つの観点が存在する。そ

れぞれの観点に基づく自己連続性は構成要素が異なるものであり、一部の研究では両者を区別して検討する必要性が指摘されている。しかしながら、現状としては両者が十分に整理されておらず、自己連続性研究の中に両者が混在している状況だと言える。

このような現状を踏まえ、自己連続性研究の今後としては、まず、自己の安定性に基づく連続性と自己の物語性に基づく連続性を、「自己連続性」という概念の下に一括りにして扱うことの妥当性を実証的に検討する必要があるだろう。両者を区別して他の変数との関連の相違を直接的に比較した研究はまだ見られないが、それぞれの観点から自己連続性を扱った研究の中には、同様の変数との関連を検討した研究も見られる。たとえば過去自己との連続性について、自己の安定性に基づく連続性と精神的健康との間にはほとんど関連が見られなかったが(Sokol & Serper, 2017; 2019)、自己の物語性に基づく連続性と精神的健康の間にはポジティブな関連が示されている(Allé et al., 2016; Holm, Thomsen, & Bliksted, 2016; McLean, Breen, & Fournier, 2010)。したがって、自己の安定性に基づく連続性と自己の物語性に基づく連続性は、構成要素だけでなく、機能的にも異なる可能性が考えられる。両者を区別することの妥当性や意義を検討するためには、このような機能的相違についても検討する必要があるだろう。

また、上述の通り、先行研究では自己連続性について様々な指標が用いられているが、妥当性・信頼性が十分に認められた確立した尺度が存在しないという問題点も指摘されている(Chishima & Wilson, 2021; Sokol & Serper, 2019)。この点についても、自己連続性の定義が抽象的であることや、自己連続性の捉え方が一様でないことが原因として考えられる。したがって、二つの観点における自己連続性を区別したうえで、信頼性・妥当性のある尺度を作成することは、今後の自己連続性研究にとって有意義だろう。

さらに、先行研究では、自己連続性を高める介入によって、自己制御や学業行動を向上させるための方法が検討されてきた(Chishima & Wilson, 2021; Hershfield et al., 2011; Nurra & Oyserman, 2018)。二つの捉え方による自己連続性の質的・機能的な相違について明らかにすることで、それぞれの目的や個人差に応じた、自己連続性に対する効果的な介入方法の開発につながる可能性が考えられる。

引用文献

- Addis, D. R., & Tippett, L. J. (2008). The contributions of autobiographical memory to the content and continuity of identity: A social-cognitive neuroscience approach. In F. Sani (Ed.), *Self continuity: Individual and collective perspectives* (pp. 71-84). New York, NY: Psychology Press.
- Adelman, R. M., Herrmann, S. D., Bodford, J. E., Barbour, J. E., Graudejus, O., Okun, M. A., & Kwan, V. S. Y. (2017). Feeling closer to the future self and doing better: Temporal psychological mechanisms underlying academic performance. *Journal of Personality, 85*, 398-408. <https://doi.org/10.1111/jopy.12248>
- Allé, M. C., d'Argembeau, A., Schneider, P., Potheegadoo, J., Coutelle, R., Danion, J., & Berna, F. (2016). Self-continuity across time in schizophrenia: An exploration of phenomenological and narrative continuity in the past and future. *Comprehensive Psychiatry, 69*, 53-61. <https://doi.org/10.1016/j.comppsy.2016.05.001>
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology, 63*, 596-612. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.63.4.596>
- Bartels, D. & Rips, L. (2010). Psychological connectedness and intertemporal choice. *Journal of Experimental Psychology: General, 139*, 49-69. <https://doi.org/10.1037/a0018062>
- Bartels, D., & Urminsky, O. (2011). On intertemporal selfishness: How the perceived instability of identity underlies impatient consumption. *Journal of Consumer Research, 38*, 182-198. <https://doi.org/10.1086/658339>
- Becker, M., Vignoles, V. L., Owe, E., Easterbrook, M. J., Brown, R., Smith, P. B., ... Lay, S. (2018). Being oneself through time: Bases of self-continuity across 55 cultures. *Self and Identity, 17*, 276-293. <https://doi.org/10.1080/15298868.2017.1330222>
- Bluck, S., & Liao, H. W. (2013). I was therefore I am: Creating self-continuity through remembering our personal past. *The International Journal of Reminiscence and Life Review, 1*, 7-12.
- Blouin-Hudon, E. M. C., & Pychyl, T. A. (2015). Experiencing the temporally extended self: Initial support for the role of affective states, vivid mental imagery, and future self-continuity in the prediction of academic procrastination. *Personality and Individual Differences, 86*, 50-56. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2015.06.003>
- Blouin-Hudon, E. M. C., & Pychyl, T. A. (2017). A Mental Imagery intervention to increase future self-continuity and reduce procrastination. *Applied Psychology, 66*, 326-352. <https://doi.org/10.1111/apps.12088>
- Bryan, C. J., & Hershfield, H. E. (2012). You owe it to yourself: boosting retirement saving with a responsibility-based appeal. *Journal of Experimental Psychology: General, 141*, 429-432. <https://doi.org/10.1037/a0026173>
- Chandler, M., Lalonde, C., Sokol, B., Hallett, D., & Marcia, J. (2003). Personal persistence, identity development, and suicide: A study of native and non-native North American adolescents. *Monographs of the Society for Research in Child Development, 68*(2), 1-138.
- Chishima, Y., & Wilson, A. E. (2021). Conversation with a future self: A letter-exchange exercise enhances student self-continuity, career planning, and academic thinking. *Self and Identity, 20*, 646-671. <https://doi.org/10.1080/15298868.2020.1754283>
- Cottle, T. J. (1967). The circles test: an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment, 31*(5), 58-71. <https://doi.org/10.1080/0091651X.1967.10120417>
- Dennett, D. C. (1992). The self as a center of narrative gravity. In F. Kessel, P. Cole, & D. Johnson (Eds.), *Self and Consciousness: Multiple Perspectives* (pp. 103-115). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Dunkel, C. S. (2005). The Relation Between Self-Continuity and Measures of Identity. *Identity, 5*, 21-34. https://doi.org/10.1207/s1532706xid0501_2
- Dunkel, C. S. & Anthis, K. S. (2003). The self across time and space in late adolescents: A test of temporal-spatial continuity in identity. In S. P. Shohov (Ed.), *Advances in Psychology Research*.

- Vol. 20 (pp. 131-144). New York, NY: Nova Science Publishers.
- Dunlop, W. L., & Walker, L. J. (2015). Cross-cultural variability in self-continuity warranting strategies. *Journal of Language and Social Psychology, 34*, 300-315. <https://doi.org/10.1177/0261927X14555873>
- Erikson, E. H. (1980). *Identity and the life cycle*. New York, NY: W. W. Norton & Company. (Original work published 1959, New York, NY: International Universities Press.)
(エリクソン, E. H. 西平 直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Ersner-Hershfield, H., Garton, M. T., Ballard, K., Samanez-Larkin, G. R., & Knutson, B. (2009a). Don't stop thinking about tomorrow: Individual differences in future self-continuity account for saving. *Judgment and decision making, 4*, 280-286.
- Ersner-Hershfield, H., Wimmer, G. E., & Knutson, B. (2009b). Saving for the future self: neural measures of future self-continuity predict temporal discounting. *Social Cognitive and Affective Neuroscience, 4*, 85-92. <https://doi.org/10.1093/scan/nsn042>
- Fu, G., Li, S., & Guo, J. (2020). The relationship between future self-continuity and mobile phone dependence of college students: Mediating role of self-control. *International Journal of Social Science Studies, 8*(3), 17-24. <https://doi.org/10.11114/ijsss.v8i3.4788>
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: the emergence of the life story in adolescence. *Psychological Bulletin, 126*, 748-769. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.126.5.748>
- Habermas, T., & Köber, C. (2015a). Autobiographical reasoning in life narratives buffers the effect of biographical disruptions on the sense of self-continuity. *Memory, 23*, 664-674. <https://doi.org/10.1080/09658211.2014.920885>
- Habermas, T., & Köber, C. (2015b). Autobiographical reasoning is constitutive for narrative identity: The role of the life story for personal continuity. In K. C. McLean and M. Syed (Eds.), *The Oxford handbook of identity development* (pp. 149-165). New York, NY: Oxford University Press.
- Hallford, D. J., & Mellor, D. (2017). Development and validation of the awareness of narrative identity questionnaire (ANIQ). *Assessment, 24*, 399-413. <https://doi.org/10.1177/1073191115607046>
- Hershfield, H. E. (2011). Future self-continuity: how conceptions of the future self transform intertemporal choice. *Annals of the New York Academy of Sciences, 1235*, 30-43. <https://doi.org/10.1111/j.1749-6632.2011.06201.x>
- Hershfield, H. E., Cohen, T. R., & Thompson, L. (2012). Short horizons and tempting situations: Lack of continuity to our future selves leads to unethical decision making and behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes, 117*, 298-310. <https://doi.org/10.1016/j.obhdp.2011.11.002>
- Hershfield, H. E., Goldstein, D. G., Sharpe, W. F., Fox, J., Yeykelis, L., Carstensen, L. L., & Bailenson, J. N. (2011). Increasing saving behavior through age-progressed renderings of the future self. *Journal of marketing research, 48*, 23-37. <https://doi.org/10.1509/jmkr.48.SPL.S23>
- 日潟敦子 (2012). サークル・テストによる中年期の時間的展望の検討 カウンセリング研究, 45, 1-10. https://doi.org/10.11544/cou.45.1_1
- Holm, T., Thomsen, D. K., & Bliksted, V. (2016). Life story chapters and narrative self-continuity in patients with schizophrenia. *Consciousness and Cognition, 45*, 60-74. <https://doi.org/10.1016/j.concog.2016.08.009>
- 石井 僚 (2015). 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, 27, 39-47. https://doi.org/10.20688/jsyap.27.1_39
- Klein, S. B. (2014). Sameness and the self: philosophical and psychological considerations. *Frontiers in psychology, 5*, 29. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2014.00029>
- Landau, M. J., Oyserman, D., Keefer, L. A., & Smith, G. C. (2014). The college journey and academic engagement: how metaphor use enhances identity-based motivation. *Journal of Personality and Social Psychology, 106*, 679-698. <https://doi.org/10.1037/a0036414>
- Löckenhoff, C. E., & Rutt, J. L. (2017). Age differences in self-continuity: converging

- evidence and directions for future research. *The Gerontologist*, 57, 396-408. <https://doi.org/10.1093/geront/gnx010>
- McCue, R., McCormack, T., McElnay, J., Alto, A., & Feeney, A. (2019). The future and me: Imagining the future and the future self in adolescent decision making. *Cognitive Development*, 50, 142-156. <https://doi.org/10.1016/j.cogdev.2019.04.001>
- McLean, K. C. (2008). Stories of the young and the old: Personal continuity and narrative identity. *Developmental Psychology*, 44, 254-264. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.44.1.254>
- McLean, K. C., Breen, A. V., & Fournier, M. A. (2010). Constructing the self in early, middle, and late adolescent boys: Narrative identity, individuation, and well-being. *Journal of Research on Adolescence*, 20, 166-187. <http://dx.doi.org/10.1111/j.1532-7795.2009.00633.x>
- 村田直子 (2008). 自己の時間的連続性に関する臨床心理学的考察 大阪大学教育学年報, 13, 55-65. <https://doi.org/10.18910/6696>
- 村田直子 (2009). 関係性から見た時間的連続性についての考察——心理療法における時間と他者—— 大阪大学教育学年報, 14, 51-61. <https://doi.org/10.18910/5542>
- 長峯聖人・外山美樹 (2020). ノスタルジアと自己——出来事連続性との関係——心理的成長間と社会的つながりを考慮して パーソナリティ研究, 28, 198-207. <http://doi.org/10.2132/personality.28.3.6>
- Nurra, C., & Oyserman, D. (2018). From future self to current action: An identity-based motivation perspective. *Self and Identity*, 17, 343-364. <https://doi.org/10.1080/15298868.2017.1375003>
- Parfit, D. (1984). *Reasons and persons*. Oxford: Oxford University Press.
(パーフィット, D. 森村 進 (訳) (1998). 理由と人格 勁草書房)
- Pasupathi, M., & Mansour, E. (2006). Adult age differences in autobiographical reasoning in narratives. *Developmental Psychology*, 42, 798-808. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.42.5.798>
- Prebble, S. C., Addis, D. R., & Tippett, L. J. (2013). Autobiographical memory and sense of self. *Psychological Bulletin*, 139, 815-840. <https://doi.org/10.1037/a0030146>
- Ricoeur, P. (1985). *Temps et récit III*. Paris: Edition du Seuil.
(リクール, P. 久米 博 (訳) (1990). 時間と物語Ⅲ 新曜社)
- Robinson, M. F., & Freeman, W. (1954). *Psychosurgery and the self*. New York, NY: Grune & Stratton.
- Rutchick, A. M., Slepian, M. L., Reyes, M. O., Pleskus, L. N., & Hershfield, H. E. (2018). Future self-continuity is associated with improved health and increases exercise behavior. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 24, 72-80. <https://doi.org/10.1037/xap0000153>
- Rutt, J. L., & Löckenhoff, C. E. (2016). From past to future: Temporal self-continuity across the life span. *Psychology and Aging*, 31, 631-639. <https://doi.org/10.1037/pag0000090>
- Sadeh, N. & Karniol, R. (2012). The Sense of self-continuity as a resource in adaptive coping with job loss. *Journal of Vocational Behavior*, 80, 93-99. <https://doi.org/10.1016/j.jvb.2011.04.009>
- Sedikides, C., Wildschut, T., Cheung, W.-Y., Routledge, C., Hepper, E. G., Arndt, J., ... Vingerhoets, A. J. J. M. (2016). Nostalgia fosters self-continuity: Uncovering the mechanism (social connectedness) and consequence (eudaimonic well-being). *Emotion*, 16, 524-539. <https://doi.org/10.1037/emo0000136>
- Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., & Arndt, J. (2015). Nostalgia counteracts self-discontinuity and restores self-continuity. *European Journal of Social Psychology*, 45, 52-61. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2073>
- Sharma, S., Åkerlund, H., Liao, H. W., & Bluck, S. (2021). Life challenges and resilience: the role of perceived personality continuity. *Aging & mental health*, 25, 2090-2099. <https://doi.org/10.1080/13607863.2020.1795619>
- Sokol, Y., & Eisenheim, E. (2016). The relationship between continuous identity disturbances, negative mood, and suicidal ideation. *The primary care companion for CNS disorders*, 18(1). <https://doi.org/10.4088/PCC.15m01824>
- Sokol, Y., & Serper, M. (2017). Temporal self appraisal and continuous identity: Associations with depression and hopelessness. *Journal of*

- Affective Disorders*, 208, 503-511. <https://doi.org/10.1016/j.jad.2016.10.033>
- Sokol, Y., & Serper, M. (2019). Experimentally increasing self-continuity improves subjective well-being and protects against self-esteem deterioration from an ego-deflating task, *Identity*, 19, 157-172. <https://doi.org/10.1080/15283488.2019.1604350>
- Sokol, Y. & Serper, M. (2020). Development and validation of a future self-continuity questionnaire: A preliminary report. *Journal of Personality Assessment*, 102, 677-688. <https://doi.org/10.1080/00223891.2019.1611588>
- Suddendorf, T., & Corballis, M. C. (1997). Mental time travel and the evolution of the human mind. *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, 123, 133-167.
- Tausen, B. M., Csordas, A., & Macrae, C. N. (2020). The mental landscape of imagining life beyond the current life span: Implications for construal and self-continuity. *Innovation in Aging*, 4(3), igaa013. <https://doi.org/10.1093/geroni/igaa013>
- Tippett, L. J., Prebble, S. C., & Addis, D. R. (2018). The persistence of the self over time in mild cognitive impairment and Alzheimer's disease. *Frontiers in psychology*, 9, 94. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.00094>
- Van Tilburg, W. A. P., Sedikides, C., Wildschut, T. & Vingerhoets, A. J. J. M. (2019). How nostalgia infuses life with meaning: From social connectedness to self-continuity. *European Journal of Social Psychology*, 49, 521-532. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2519>
- Zhang, Y., & Chen, M. (2018). Character strengths, strengths use, future self-continuity and subjective well-being among Chinese university students. *Frontiers in Psychology*, 9, 1040. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.01040>
- Zou, X., Wildschut, T., Cable, D., & Sedikides, C. (2018). Nostalgia for host culture facilitates repatriation success: The role of self-continuity. *Self and Identity*, 17, 327-342. <https://doi.org/10.1080/15298868.2017.1378123>

(受稿 3 月 31 日 : 受理 9 月 29 日)